

藤枝市史だより

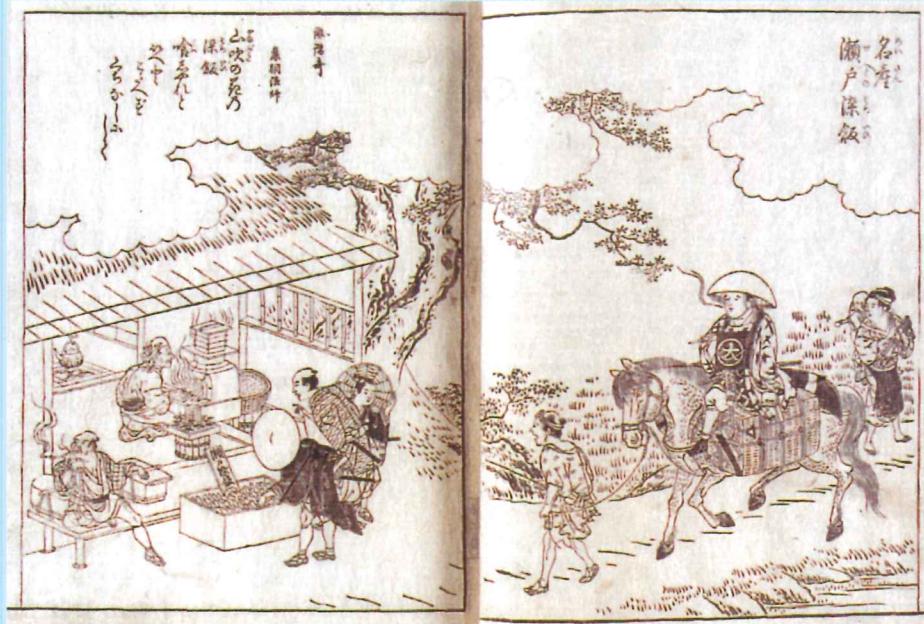
そめ いい

第11号

平成16年10月15日発行
編集・発行 藤枝市郷土博物館

藤枝市若王子500(蓮華池公園内)
TEL 054(645)1100

E-mail
fujieda-muse@ny.tokai.or.jp



『東海道名所図会』(藤枝市郷土博物館蔵)

とよんでいます。瀬戸の染飯が青柏に盛つて売られていたというのは、珍しい記録として注目されます。柏は旧暦三月頃に新葉が出ますから、一茶はちょうど季節のものを目にして、旅情をそぞらへ、句帖に書き留めたのでしょうか。

現代の俳諧師・金子兜太氏は、「一茶の句の意味を、われわれのようなものでも、柏の青葉に盛つた染飯がいただけるとは嬉しいねえ。ありがたいねえ。こう眺めているだけでも、涼しい風が通るようですね。」と読み解いています(『一茶句集』)。

一茶より一八〇年ほど前の江戸時代前期に生きた鳥丸光広は、多才多芸の公家で、とりわけ歌道に優れていましたが、この時期の代表的な狂歌作者としても知られています。編者不詳で、元和(一六一五)二四頃の刊行とされる最初の狂歌撰集『新撰狂歌集』に、

つくづく見てもくはれぬ物なれや
口なし色のせとの染飯

という、瀬戸でよんだ光広の狂歌が収められています。光広は、いくたびか京都から関東に旅していますから、実際に瀬戸の染飯をして作つたのが先の狂歌でしょう。染飯を食べられないのも無理はない、口無しなのだから、と染飯の染料で、実が熟しても口を開かないことから「口無し」と称されたという梶子にかけてしやれてみたのです。

染飯や我しきが青柏とよんでいます。瀬戸の染飯が青柏に盛つて売られたというのは、珍しい記録として注目されます。柏は旧暦三月頃に新葉が出ますから、一茶はちょうど季節のものを目にして、旅情をそぞらへ、句帖に書き留めたのでしょうか。

現代の俳諧師・金子兜太氏は、「一茶の句の意味を、われわれのようなものでも、柏の青葉に盛つた染飯がいただけるとは嬉しいねえ。ありがたいねえ。こう眺めているだけでも、涼しい風が通るようですね。」と読み解いています(『一茶句集』)。

瀬戸の染飯は、旅の案内書である名所記には万治三年(一六六〇)頃刊行の浅井了意『東海道名所記』に初めて登場し、こののち旅人に広く知られるようになりました。また遠近道印(富山藩医の藤井半知)作で、元禄三年(一六九〇)刊行の『東海道分間絵図』には、せと(瀬戸)に「そめい、名物也」と記されています。秋里籬島の『東海道名所図会』(寛政九年(一七九七)刊行)は絵入りの名所案内書として、広く世に迎えられ、広重の『東海道五拾三次』にも大きな影響を与えました。「名産瀬戸染飯」を売る茶店が描かれた図(上段図版参照)には、店の中で老婆が米を蒸し、店先には染飯が箱に入れて並べられ、この場面に龜相法師の作として、

山吹の花の染飯喰しやれ

とへどこたへずくちなしにして

と、山吹色の染飯を梶子にかけた狂歌が書かれています。

(専門委員長 湯之上隆)

染飯に食指を動かさなかつたらしい光広と、一茶の違いには興味深いものがあります。この歌は、三十六歌仙のひとり素生の作で、『古今和歌集』に収められた、
山吹の花色衣ぬしやたれ 間へど答へずくちなしにして
に着想を得てよまれたようです。山吹色は、鮮やかな赤味
を帯びた黄色で、梶子の実を煎じて染め、蘇芳を少し加え
るとこの色になるといいます。
鳥丸光広と同時代に生きた斎藤徳元は、
つかひ錢たゆれば喰ぬそめ飯の

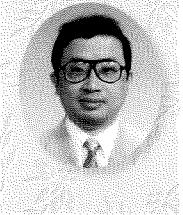
続・名物瀬戸の染飯

名産
瀬戸染飯

大正期の新聞記事から

近現代担当調査委員
県立掛川西高等学校教諭

村瀬 隆彦



両以下で一両もないのが周智と引佐の二郡あります。歩く人・自転車・荷車がいきかい、それとあります。馬を利用した車両と人力車が混じるというのが、當時の主要道路のようすだつたようです。藤枝焼津間の幅の広い道路の必要性が新聞紙上にみえるのはこのころからです。

志太地区には『志太ニュース』が発行されていて、地域に密着した情報を持っています。県の範囲での代表的な地方新聞といえば、一九四一（昭和十六）年に、国の指示で県内六紙が統合して誕生した『静岡新聞』があげられます。市史を編むにあたって、新聞紙上に、藤枝からどのような記事が発信され、どのように描かれていたのかを確認するのも必要なことでしょう。

昨年度までの事業により、『静岡新聞』の前身にあたる『静岡民友新聞』の藤枝・志太郡関連記事が調査され、簡単に確認できるようになりました。そこで今回は、大正期の記事を読んで興味をもつたいくつかを紹介してみたいと思います。

○現在と戦前で大きくことなるのは、兵役が国民の義務であったことでしょう。当時の志太郡の男子が数多く入隊した浜松聯隊が、中国のドイツの根拠地青島攻略にむけて出発する前年の一九一三（大正二）年十二月二十七日朝刊には次のような記事がみえます。

「年々徴兵忌避者の増加するは事実にして本県にても現在に於て所在不明の為め徴兵終決処分未済者として数へられるもの七百五十名に達し本年のみにて六十三名あり」とし、郡市別に数をあげています。七十人代が四、六十人代が三、五十人代が二、三十人代が四、十人代が二（四十人代・二十人代はなし）で、志太郡は三六名です。少ないほうですが、それでも、徴兵令違反者を志太郡長が告発することを報じた記

事をしばしば目にします。明治末年の在郷軍人の数は三四五四九人ですので、兵役にある人の約二%が忌避をしていると考えられます。

そのほか、花柳病等兵士の伝染病や違法行為に関する記事もあるなど、人々は軍隊関係記事から、戦果や慰靈行事等の情報だけを得ていたのではないことがわかります。

○「藤枝駅前通り島田街道分岐点」で、一九一九（大正八）年十一月二十一日から二十七日にかけて、交通量調査をした結果が、二十九日朝刊に載っています。七

日間合計で、歩行者一四九六八、牛馬五四、人力車九〇一、自転車七八一七、馬車九七、荷車九二六一、馬力車五三七、自動車一六とあります。また、一九二二（大正十一）年八月十九日朝刊には「自動車の最も多いは田方の五十五両、駿東の二十一両、賀茂、静岡の各十二両其他は十

| 志太郡の一部藤枝駅通り島田街道分岐点における交通量調査は既報の如く長谷川、池谷、梅澤の三事務所にて去る廿一日午前六時より調査に着手し、廿七日午後六時終了せるが其の通行人員は左の如き数字を示せりと | |
|---|------|
| 歩行者 | 一六六四 |
| 自転車 | 二七七 |
| 牛馬 | 五四 |
| 馬車 | 九二六一 |
| 人力車 | 九〇一 |
| 自転車 | 五三七 |
| 馬力車 | 七八一七 |
| 自動車 | 一六 |

静岡民友新聞 大正8年11月29日

光力の不足

湯水で盜用の爲めて

て勇力會社空騒ぐ

◆保安課で嚴重取締る

に藤枝電力の発電及配電網に於ける電力は規定五十ボルトである

静岡民友新聞 大正11年2月17日

| 驚くべし | |
|------------|-------------------------------|
| 湯水で盜用の爲めに | て勇力會社空騒ぐ |
| ◆保安課で嚴重取締る | |
| | に藤枝電力の発電及配電網に於ける電力は規定五十ボルトである |
| | |

青島——郷土研究の仲間たち

元市史編さん調査協力員

八木一郎



青島地区の郷土資料を調べて、それを保存している仲間を紹介します。

青島南公民館南風まつり展示部と、青島史蹟保存会です。年輩の気楽な仲間で、地区の人達の協力で調査等を行っています。

公民館が平成二年に開館して、公民館まつりに地域性を持たせようと、まず瀬戸の染飯茶屋を組み立て、染飯を作り、赤いたすきの娘さんが売り、別室に資料を展示しました。

以後、展示のテーマをまつりのテーマとして、展示部が年間を通して調査研究しています。

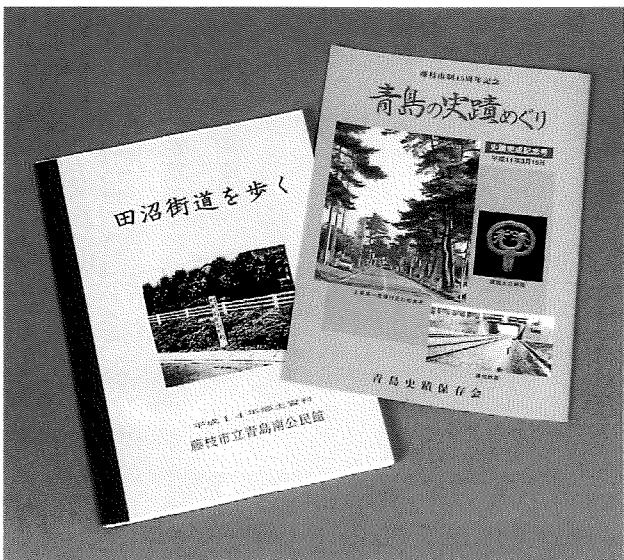
青島の学校以後、資料保存のため、展示のあと図録にまとめて、公民館の郷土資料シリーズとして七冊できました。次に青島の史蹟保存会は、共立印刷創業者で地理専攻の小林治助氏がウォーキングを始め、その途々に史蹟を探し出し、仲間に呼びかけて青島史蹟保存会を作りました。平成六年のことでした。

調査をまとめ、地域の人達の協力を得て、一七本の標識と説明板を立てました。そして、図録「青島の史蹟めぐり」を編集し、一廻り一二kmの絵地図を添えました。

史蹟碑は志太一里塚、田沼街道二基、塩取橋、岡野繁蔵出生地、田中藩領榜示石二基、古東海道、東海道追分、天ヶ谷遺跡、染飯茶屋、千貫堤、戸長役場、池田屋敷、青地雄太郎出生地、田沼街道境橋、軽便鉄道駿遠線です。

資料は駿河資料、志太郡誌、青島町誌や古文書等ですが、実地調査では多くの方々の協力がありました。

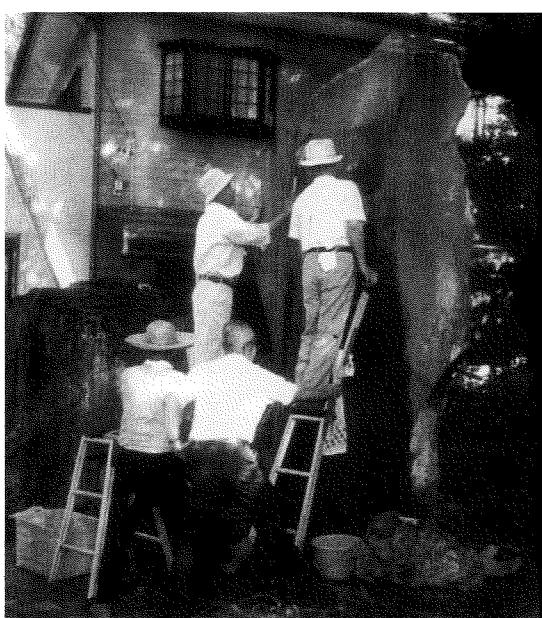
二つのグループの活動での話題



【右】『青島の史蹟めぐり』(青島史蹟保存会作成)
【左】『田沼街道を歩く』(青島南公民館南風まつり展示部作成)

今までのテーマは、瀬戸の染飯、軽便鉄道、東海道と藤枝宿、青島の地名、青島百年人物誌、青島の伝説と行事、青島の学校、田沼街道、青島のお庚申さん、藤枝駅と青島、青島の碑、青島の野仏、青島のお天王さんの一三です。

青島の学校以後、資料保存のため、展示のあと図録にまとめて、公民館の郷土資料シリーズとして七冊できました。題字「運用之妙存乎一心」は南宋の武将岳飛の語で、書かれた有栖川熾仁は東征官軍の大総督の宮さんです。中村秋香は、静岡の人で東京大学の教鞭もとり、青島小学校の校歌の作詩、西益津中学校にある書家數崎彦八郎の頌徳碑の撰者です。



運用之妙存乎一心之碑 拓本とり

市史編さん委員・ 調査協力員の紹介

左記のとおり委員の交替がありました。

◆市史編さん委員◆

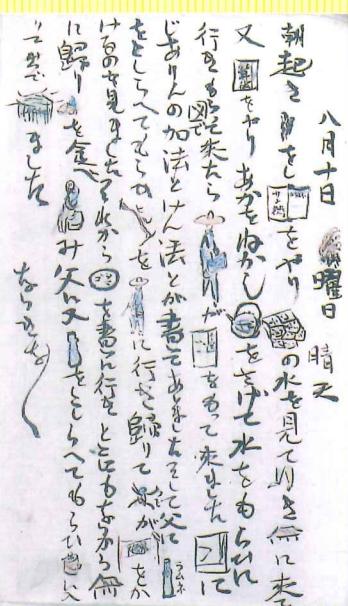
- 新館 正義（市議会議長）
- 旧山下 末治（市議会議長）

- 新良知 直治（自治会連合会代表）
- 旧富岡 清志（自治会連合会代表）
- 新上田 東幸（葉梨地区）
- 旧渡辺 保次（葉梨地区）

明治時代の小学生日記を復刻

藤枝市史叢書8「岡村傳一郎少年の日記」

市史編さん調査協力員の岡村勇氏が所蔵する日記を活字化し復刻したもので、日記の筆者は岡村勇氏の父親の傳一郎氏です。傳一郎氏が尋常小学校六年生の時、担任の岩本先生に勧められ、明治四十二年（一九〇九）五月十二日から翌年の三月二十二日まで毎日欠かさず書いています。



明治42年8月10日の日記（原本）

やその内容、式典、遠足などの行事、遊びの様子、家庭での子守や風呂の水汲み、薪売り等の他に、一月十一日の田打ち、紀元節の田遊び、旧行事や蓄音機を聞きに行ったり、西洋

軽業を見た時の様子なども書かれており、明治時代末期の学校生活、家庭生活、地域の様子など当時の暮らしがよくわかる資料です。（B5判／本文・一四八頁／価格・一、〇〇〇円）

知ろう・学ぼう・藤枝の歴史

郷土博物館にて販売中です

| | | |
|---------|------------|--------|
| ○藤枝市史 | 資料編2 古代・中世 | 3,500円 |
| | 別編 民俗 | 4,000円 |
| ○藤枝市史研究 | 第1~2号 | 800円 |
| | 第3~5号 | 1,000円 |
| ○藤枝市史叢書 | 2 (広幡村誌) | 800円 |
| | 4 (瀬戸谷村誌) | 800円 |
| | 5 (青島村誌) | 1,200円 |
| | 6 (葉梨村誌) | 800円 |
| | 7 (西益津村誌) | 1,000円 |

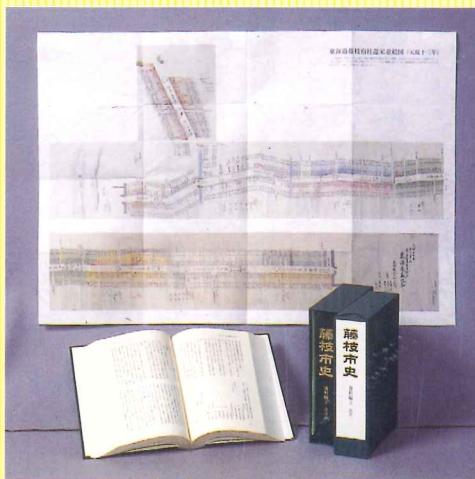
* 1 (稻葉村誌)、3 (大洲村誌) は完売となりました。

○藤枝市史だより (年2回発行) 郷土博物館にて配布しています

郵送を希望する場合は直接お問い合わせ下さい。

江戸時代の藤枝へタイムスリップ

「藤枝市史」資料編3 近世一



『藤枝市史』資料編3 近世一
付録の「東海道藤枝宿往還家並絵図」

江戸時代の藤枝に関する一三、〇〇〇余点の古文書について調査を行い、東海道藤枝宿とその周辺に広がる農村に関する資料に焦点を当て、収めました。

選りすぐりの五一六点を収録しました。藤枝宿については、成立から宿場の仕事・瀬戸川の川越しや、江戸末期に盛んになつた宿場の文化に関する資料を収めました。

市域の大部分を占めていた農村については、村々を支配していた旗本などの領主や村の暮らしぶり、新田開発、水争い、災害などに関する資料を収めました。

また、「東海道藤枝宿往還家並絵図（天保十三年・一八四二）」が付録されています。藤枝宿の家並は街道を挟んで、南側は益津郡、北側は志太郡に属しており、八つの村の一部が集まつて藤枝宿を構成しています。当時の町の長さや各家の人名、職業などが記入されていて、宿の様子が具体的にわかります。

(A5判／本文・九〇八頁／口絵・八頁
／付録「東海道藤枝宿往還家並絵図」
B2判・カラー／価格・三、五〇〇円)

『藤枝市史研究』第5号を発刊



市史編さん事業の研究成果をまとめた『藤枝市史研究』第5号（写真）を刊行しました。論文では、大塚英三調査委員（愛知県立大学教授）による『近世後期駿遠地方における地域金融』、土居和江調査委員（島田学園高校教諭）による『藤枝地域の満州開拓移民』が紹介されているほか、北原勤専門委員（県立掛川工業高校教諭）による『滝沢区有文書「庄屋引渡諸帳面目録帳」』の調査報告や平成十二年度に開催された村瀬隆彦調査委員（県立掛川西高校教諭）の市史学習会記録「藤枝防空監視哨と県下の空襲」、長田直子調査補助員（総合研究大学院大学院生）による青山八幡宮所蔵の文書についての資料紹介が掲載されています。

●問合せ先●

藤枝市郷土博物館

〒426-0014 藤枝市若王子500

☎ 054-645-1100 FAX 054-644-8514